読みもの

読み聞かせ　から　ひとり読みへ

読み聞かせてもらう体験が、ひとり読みへの要求へとつながっていきます。
それは、幼年童話にかぎらず、児童文学の全てに共通することだと思います。

物語を通して教えてくれるもの

物語には、社会の中のいろんな人間が描かれています。その物語の中の人物に自分を投入することは、想像力、イマジネーションが必要です。このイマジネーションが培われることによって、中学生・高校生の頃の難しい時期に、他者を思いやるということができるようになると思います。

他者を積極的に理解しようとする努力は、先ず、本の中の、物語の中の、困っている人や弱い人或はどうしようもない人、仕方のない人を理解しようとするところから始まると思います。

【児童文学者　百々佑利子（愛川町教育講演会で）】

コラム

大事な想像力はどのようにして培われるの？

読書は、自分なりの思いや願い、夢などを織り込んでいける余地を大きく持っています。

自分なりの感性や知性または情感といったものを、思う存分働かせながら自分の思いのままに読み進めていくことができます。

だからこそ、文字や行間の世界が大きな意味をもち、そのことが知らず知らずのうちに、自己の内面を深く見つめる目（こころ）を培うことにつながっていき、想像力の源泉となっていくのです。

しかし、そこには、当然主体的な取り組みが要請され、そのためのエネルギーが相当に必要とされてきます。読書は、楽に、楽しめるものではありません。それだけ培われるものは、大きいと言えるでしょう。

【愛川町子どもの読書を推進する会】

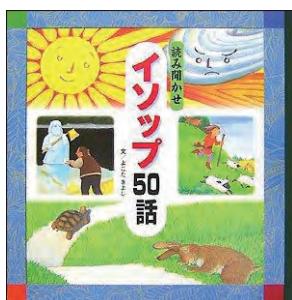
あるきだした小さな木

テルマ・ボルクマン・ドラベス 作　シルビー・セリグ 絵　花輪 莞爾 訳
偕成社　1969年《フランス 1967》　68p　24×20cm

深い森の中で、パパとママの木のすぐそばに生える幸せなちびっこの木がありました。ある日、人間の男の子が森に迷い込み、そして、彼を見つけ、愛おしそうに抱き帰る家族。ちびっこの木は彼らと暮らしたいと考えます。歩きたい一心で、体をものすごくゆすり、ついに根っこを地面から抜いて歩き出しました。

歩くうち、「なるほど、そうだったのか…」と考えるきっかけが訪れます。“人間と暮らすのはうれしいけれど、自分にはもっと沢山見たいものがある。つかまってなぞなるものか”と。旅をしていろんな人と出会い、様々な経験をした木はついに、自由で独立した大きなおとなの木になりました。

1967年度フランス児童図書最優秀賞などを受賞しました。

読み聞かせ　イソップ50話

よこた きよし 文　飯岡 千江子・いたや さとし・武井 淑子 絵
チャイルド本社　2007年　108p　25×25cm

北風と太陽が、旅人の上着を脱がす競争をしました。北風が強く風を吹きつけますが、寒くてしっかりと着込んでしまいます。太陽が暖かく照らすと、旅人は上着を脱いだのでした。人に厳しくつらく当たるよりも、あたたかい言葉や態度のほうが、心を動かしやすいという教訓です。

「田舎のねずみと町のねずみ」「ウサギとカメ」「金のおの」など50の寓話が収められており、それらの終わりに短い“教訓”が書かれています。

全部で400話以上あるというイソップの寓話は、16世紀ごろ日本に持ち込まれ、その発祥は紀元前にまでさかのぼるようです。

いぬうえくんがやってきた

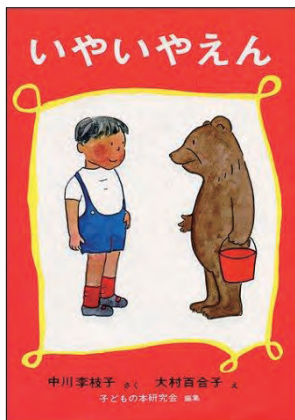
きたやま ようこ 作
あかね書房　1996年　79p　21×16cm

ぼくは、クマのくまざわくん。原っぱでイヌのいぬうえくんと友だちになり、一緒に遊びました。 水あびしていると、いぬうえくんが「くまざわくん、ともだちはみずくさくないほうがいい」というので、川からあがりました。「くまざわくん、ともだちはいっしょにくらしたほうがいい」と言うので、ぼくの家で一緒に暮らすことにしました。

でも、クマとイヌはどうやら“習性”が違うようで、お互いガマンできずケンカに。いぬうえくんは出て行ってしまいました。ぼくはさみしくて、鼻水と涙の味の紅茶を飲み、いぬうえくんのことを考えながら眠りました。次の朝ぼくが目を覚ますと…。

いぬうえくんとくまざわくんのシリーズは6巻あります。
他に『ゆうたくんちの いばりいぬ』(あかね書房)があります。

いやいやえん

中川 李枝子 作　　大村 百合子 絵
福音館書店　　1962年　　188p　　22×16cm

赤色の表紙に登場する青いパンツの男の子は「しげる」。茶色い子ぐまは「やまのこぐちゃん」。好奇心いっぱいでいたずら好きの「しげる」を主人公に、「ちゅーりっぷほいくえん」のお友だちの話が七つ収められています。
約束を忘れてばかり、「いやだ、いやだ」がおさまらないしげるですが、連れていかれた「いやいやえん」では、どんな悪いことをしても怒られません。ちゅーりっぷ保育園なら、ものおきにいれられてしまうのに…。
ファンタジーと現実を自由に行き来する子どもたちの世界が生き生きと描かれています。
他に『ももいろのきりん』『たんたのたんけん』（福音館書店）など多数あります。

エルマーのぼうけん

ルース・スタイルス・ガネット さく　　ルース・クリスマン・ガネット 絵　　わたなべ しげお 訳
福音館書店　　1963年《アメリカ 1948》　　116p　　22×16cm

ぼくの父さんのエルマーが小さかった時の話です。としをとったのらねこから「どうぶつ島」に捕（と）らえられているりゅうの話を聞きました。早速（さっそく）、「どうぶつ島」に行ったエルマーは、とら、さい、ライオン、ゴリラに会い恐ろしい思いをしましたが、そこはエルマーのこと。これらの猛獣（もうじゅう）をうまく使いこなし、りゅうのとじこめられているところまで行くことができました。
『エルマーとりゅう』では、りゅうの背中に乗り、カナリヤたちの島で王さまを助け、『エルマーと16ぴきのりゅう』ではりゅうの家族を助け出しました。
動物たちの表情を的確にとらえた挿絵は、作者の母親が描いています。

おしいれのぼうけん

ふるたたるひ/たばたせいいち 作
童心社　　1974年　　80p　　27×19cm

「ここはさくらほいくえんです。さくらほいくえんには、こわいものがふたつあります。」のでだしに、まず、ぐっと心が引きつけられます。それは、言うことをきかない子がとじこめられる“おしいれ”と、先生がしてくれる人形劇の“ねずみばあさん”です。ある日のお昼寝の時、おもちゃの取りっこをして先生におしいれにいれられたさとしとあきらが、暗いおしいれの中のねずみばあさんの国で、大冒険をします。保育園の日常から一転して、ぶきみな世界へと入っていくところは、スリル満点です。子どもらしい好奇心とすなおさ、いたずらっ子の顔にふっとのぞくやさしさも感じさせてくれる絵物語です。
他に『だんぷえんちょう やっつけた』（童心社）もあります。

読みもの

おともだちにナリマ小

たかどの ほうこ 作　　にしむら あつこ 絵
フレーベル館　　2005年　　64p　　21×16cm

ハルオは、児童15人の、とても小さな小学校の 1 年生です。いつも友だち2人とカツラの木の下で待ち合わせて学校に行きます。でも今日は2人の姿がなく、ずっと先の方で声がします。あわてて追いかけて行ったのですが…、あれあれ？いつもと同じ道の筈なのに何だか変な気分です。小学校に着くと、教室も何だか変な気がします。友だちも、顔は同じなのですが何かが変。勉強もいつもと違うぞ！と思ったら何とそこはキツネ小学校だったのです。

他に『みどりいろのたね』(福音館書店)『へんてこもりにいこうよ』(偕成社)など多数あります。

きょうりゅうのかいかた

くさの だいすけ 文　　やぶうち まさゆき 絵
岩波書店　　1983年　　41p　　21×15cm

カメ、インコ、ザリガニと、いろんな小さい生き物を飼っている“まきと”と“めぐみ”は、いつもお父さんに「もっと大きい動物を飼わせて！」と頼んでいました。例えば犬やうさぎのような…。

ところがある日、お父さんがもらってきたのは、なんと、きょうりゅうの子どもだったのです。よろこんだ2人は「どん」という名前をつけ、友だちと協力してきょうりゅうの家を作りました。そして、毎日沢山必要なえさ、沢山出るフン、そしておふろの世話をし、予防接種も受けさせます。でも、しっかり世話をしているのに、なんだかきょうりゅうの元気がないのです…。

くしゃみくしゃみ天のめぐみ

松岡 享子 作　　寺島 龍一 画
福音館書店　　1968年　　96p　　22×20cm

昔、昔、くしゃみがものすごいおっかあが住んでいました。人や牛や馬だけでなく、屋根まで吹き飛ばしてしまうのです。あるとき、ひとり息子の“はくしょん”が、人の足では越えられない険しい山の向こうの村へ行ってみたいから、おっかあの一世一代の大くしゃみで飛ばしてくれと言い出しました。さて、“はくしょん”が飛ばされて着いたところは…。

くしゃみのほかに、しゃっくり、いびき、おなら、あくびで幸せをつかんだお話が収められています。どのお話も奇想天外ですが、とても読みやすく書かれています。

くまの子ウーフ

神沢 利子 作　　井上 洋介 絵
ポプラ社　　1969年　　128p　　22×17cm

「うーふー」って、うなるから、名まえが「くまの子ウーフ」。遊ぶのが大好き。なめるのと食べるのが大好き。それからいろんなことを考えるのも。

第一話「さかなには　なぜしたがない」では、さかなになりたいと考えるウーフ。でもフナが、「さかなになりたけりゃ、おまえのしたをひっこぬいてからだ」と空っぽのくちを見せたので、ウーフは驚いて家へ逃げ帰ります。でもお母さんから“さかなにしたがないわけ”を教えてもらい、“ぼくはくまの子でよかった”と安心しました。

「ウーフ　は　おしっこでできてるか？」「いざというときって　どんなとき？」「おっことさないもの　なんだ」などの短いお話が９つ入っています。

他に『ふらいぱんじいさん』（あかね書房）など多数あります。

ケイゾウさんは四月がきらいです。

市川 宣子 作　　さとう あや 画
福音館書店　　2006年　　128p　　24×16cm

多くの幼稚園、保育園、小学校で飼育されている小動物たち。彼らにだって悲喜こもごも、いろいろあるのです。

にわとりのケイゾウさんは四月がきらいです。だって、入園したての子はあちこちでピーピー泣くし、進級した子はしょっちゅうケイゾウさんの世話を忘れ、時々くれるエサも、うさぎのみみこにだけやろうとします。ケイゾウさんは中庭のやわらかそうな草を食べたいのに、新しい子が怖がったりけとばしたりするからと、四月は小屋から出してはもらえないのです。

同居人のウサギのみみこのわがままや、元気な子どもたちに翻弄されながらのケイゾウさんの一年。何とも楽しくほのぼのとしたお話です。

子うさぎましろのお話

佐々木 たづ 作　　三好 碩也 絵
ポプラ社　　1970年　　32p　　25×22cm

クリスマスの日、サンタと同じ北の国に住む白うさぎ「ましろ」は、真っ先にプレゼントをもらいました。あまり早くもらったので、もっと何か欲しくなった「ましろ」は、体を炭で黒く塗り、違ううさぎになりすまします。もどってきたサンタさんからサンドイッチと「一粒のたね」をもらい、しめしめと思っていたのですが、黒く塗った体が元に戻らなくなってしまいました。うそをついた罰だと気づき、せめて、もらった種を返そうとする「ましろ」…。

クレヨンタッチのシンプルな絵とともに、北の国の「ましろ」のお話が優しく展開されます。

こぐまのくまくん

E・H・ミナリック ぶん　モーリス・センダック え　松岡 享子 やく
福音館書店　1972年《アメリカ 1957》　60p　22×16cm

くまくんは、雪が沢山降るのを見て、寒いから着るものが欲しいと帽子、オーバー、ズボンを次々着せてもらいました。それでもまだ寒いというくまくんを、お母さんは裸にしました。そしてくまくんの体をポンポンとたたき、「ほうら、けがわのマントなら、ここにありますよ」と言いました。それでくまくんは、もうちっとも寒くなかったと気づきます。この第一話「くまくんのけがわのマント」のほかに、短いお話が 3 つ入っています。
『かえってきたおとうさん』『くまくんのおともだち』『だいじなとどけもの』『おじいちゃんとおばあちゃん』(福音館書店)へと続きます。絵本から童話への橋渡しに最適と紹介されています。

ジェインのもうふ

アーサー・ミラー 作　アル・パーカー 絵　厨川 圭子 訳
偕成社　1971年《アメリカ 1963》　70p　24×20cm

ジェインのもうふはピンク色。ふんわりあたたかで、ジェインのたからものです。どんな時もこのもうふ「もーも」があればごきげんです。どんどん背が伸び、ベビーベッドから大きいベッドになり、絵本も自分でみられるようになっても、ジェインは「もーも」を離しません。 ある朝、その「もーも」がなくなってしまい、ジェインは悲しくて泣きながら探します。やっと見つかった「もーも」は、もうボロボロで穴だらけですが、ジェインはまた「もーも」と一緒にベッドに入ります。安心してすやすや眠れます。そんなジェインも小学生になり、いつのまにか「もーも」なしで寝ていました。そして小鳥が「もーも」を、巣を作るために持っていってしまったことを知ったジェインは…。

風の草原　トガリ山のぼうけん①

いわむら かずお 作・絵
理論社　1991年　136p＋画12p　21×15cm

トガリネズミのトガリィじいさんのところへ、近くにすむ孫の「キッキ」「セッセ」「クック」が、毎夜話を聞きに来ます。じいさんは“とっておきの話――天につきささるトガリ山のてっぺんに登った話”を始めます。
じいさんは、たくさんの生き物からトガリ山の話を聞き、テントウムシと出会いテントと名づけて旅を共にします。そこへ首に鈴をつけたネコが現れ、ヤマネコになりたいというのですが、鈴が邪魔になります。その鈴をとったら…。
じいさんの話は続きます。

なぞなぞのすきな女の子

松岡 享子 作　　大社 玲子 絵
学研　　1973年　　61p　　23×19cm

　子どもたちはなぞなぞが大好きです。この物語の女の子も毎日お母さん相手になぞなぞ遊び。くたびれたお母さんに、おもてに行って別の人を探してと言われた女の子は、森へ出かけます。そこで出会ったのは、お昼ごはんを探しにきたオオカミです。おいしそうな女の子を見つけ喜ぶオオカミですが、なぜか女の子となぞなぞ対決に…。明るく楽しい絵もお話にぴったりです。
　他に『じゃんけんのすきな女の子』(学研)、『みしのたくかにと』(こぐま社)、訳本に『番ねずみのヤカちゃん』(福音館書店)があります。

ふしぎな500のぼうし

ドクター・スース 作・絵　　渡辺 茂男 訳
偕成社　　1981年《アメリカ 1938》　　62p　　24×18cm

　ある日、町にでかけたバーソロミューは、そこで出会った王さまの命令で、ぼうしを取りました。ところが、頭の上にはまだぼうしがのっていて、何度取っても、またのっています。怒った王さまは、バーソロミューをお城へ連れていってしまいました。王さまの命令で、帽子の専門家、博士、魔法使いなどが呼ばれ、ぼうしを取ろうとしますがだめです。もうやりようがないと、高い塔からバーソロミューを突き落とそうとしたとき、ぼうしは500個目になっていたのです。
　さて、ぼうしは…？　そしてバーソロミューの命は…？

ふたりはともだち

アーノルド・ローベル 作　　三木 卓 訳
文化出版局　　1972年　　64p　　21×15cm

　ちょっぴりわがままだけどなぜか憎めなくて、友だち想いのがまくんと、活動的でロマンチストで、やっぱり友だち想いのかえるくんの、ほのぼのとしたお話が5つ収められています。
　その中の一話「おてがみ」。誰も手紙などくれたことがないと落ち込むがまくんを励ますため、かえるくんは急いで家に帰り、それは素敵なお手紙を書きました。かたつむりに配達を頼み、がまくんの家に戻ると、ふたりで一緒にお手紙が届くのをまつのです。それは幸せな気持ちで…。
　続編に『ふたりはいっしょ』『ふたりはいつも』『ふたりはきょうも』(文化出版局)があります。他に『どろんここぶた』『ふくろうくん』(文化出版局)などもあります。

ぼくは王さま

寺村 輝夫 作　　和田 誠 絵
理論社　　1961年　　218p　　22×16cm

甘くって、ふんわりした、あったかいたまごやきが大好きな王さまのうちに、あかちゃんがうまれました。とっても喜んだ王さまは国中の人たちを呼んでお祝いすることに。ごちそうはもちろん「たまごやき」。でもニワトリのたまごではとうてい足りません。そこで王さまは思いついたのです。「ぞうのたまごをみつけよ！」 そこで大臣や家来たちは…（第一話「ぞうのたまごのたまごやき」より）。ユーモアたっぷりのお話が4話収められています。

王さまシリーズの本は、ほかにも多数あります。

ほらふき男爵の冒険

G.A.ビュルガー 編　　斉藤 洋 再文　　はた こうしろう　絵
偕成社　　2007年《ドイツ 1786》　　144p　　22×16cm

このお話のもとは、200年以上も前に、ドイツのミュンヒハウゼン男爵が自身の冒険談として周囲に語ったほら話です。斉藤洋が子どもでも読める冒険談として再文したものです。

ではそのひとつを…森で馬ほどもある大鹿と出会った時のことだ。私はサクランボの種を銃につめ、ズドン！大鹿は走り逃げた。それから1～2年後のこと。なんとあの大鹿は三本の角を持ち、真ん中の角はサクラの木であったのだ！…といった具合です。

狩りに、戦いに、月旅行に、さらに地底旅行まで、奇想天外な発想に、ほら話と分かりつつも楽しめます。

ポリーとはらぺこオオカミ

キャサリン・ストー　作　　マージョリー・アン・ワッツ　絵　　掛川 恭子 訳
岩波書店　　1979年《イギリス 1955》　　86p　　22×16cm

オオカミが、ポリーの家の庭になにやら埋めています。ブドウの種、はしごの一段目、しまいには豆を買ってきて埋めました。そうです、「ジャックと豆の木」のように、大きな木が生えると思い込んでいるのです。それを登ってポリーの部屋に行き、食べる計画だと言うのです。ポリーはその豆ではダメよといってやりました。だって「ジャックと豆の木」では、牛かなにかと取りかえた魔法の豆なんですもの、と。オオカミは「でも、ウシなんかもっていないよ」と涙を流しています。

懲りないオオカミは「赤ずきん」「3びきのこぶた「七ひきの子ヤギ」などのお話を中途半端に読んだまま、ポリーを食べる作戦を次々に仕掛けてきます。…

ミリー・モリー・マンデーのおはなし

ジョイス・L・ブリスリー 作　菊池 恭子 絵　上條 由美子 訳
福音館書店　1991年《イギリス 1928》　200p　22×19cm

あるところに、「ミリー・モリー・マンデー」と呼ばれる小さな女の子が、優しい大人たちと一緒に住んでいました。長い名前とは逆の短い足は、とても元気が良くて、お使いするのにはおあつらえむきでした。ある日、6人の家族から一度にお使いを頼まれた「ミリー・モリー・マンデー」は、途中でお使いの内容を一つだけ忘れてしまいます。でも、そのお使いを頼んだ大好きなおばさんのことを思い浮かべて考えると、うまい具合に思い出せました。
かわいらしい「ミリー・モリー・マンデー」の日常のできごとを、子どもと一緒にゆったり読んでください。

ワニのライルがやってきた

バーナード・ウェーバー 作　小杉 佐恵子 訳
大日本図書　1984年《アメリカ 1962》　57p　28×21cm

東88番通りの空家に、プリムさんの一家が引っ越してきたその日、おふろ場のドアをあけると、そこにはワニが！大騒ぎの最中、ヘンテコな身なりの男が現れ、一通の手紙をおいて消えました。このワニは気立てがよくて芸もたくさんできるから、よろしく頼むという手紙です。プリム一家と素敵なワニのライルはすぐに仲良しになりました。曲芸やお手伝いやスポーツもできて、世間でも有名なワニになりました。
でもある日突然、あの手紙の男が、有名になったライルを取りもどしに来たのです…。
ワニのライルのお話は、シリーズになっています。

わたしはクジラ岬にすむクジラといいます

岩佐 めぐみ 作　高畠 純 絵
偕成社　2003年　102p　22×16cm

クジラ岬に住むクジラくんは、少し前までクジラ学校の先生でした。でも、唯一の生徒のペンギンが卒業したので、先生を引退したのです。そして、見知らぬ誰かからの返事を期待して、手紙を沢山書き、アザラシ配達員に配ってもらったのです。そうすると、待ちに待った返事が来ました。オットッ島のクジラ「くーぼー」からです。
このあと、そのくーぼーとの手紙のやりとりが、すてきなことに発展し、とてもうれしいことが起こるのです…。
前作に『ぼくはアフリカにすむキリンといいます』(偕成社)があります。

車のいろは空のいろ　白いぼうし

あまん きみこ 作　　北田 卓史 絵
ポプラ社文庫　　2000年　　125p　　22×18cm

タクシー運転手の松井さんが、細い車道のすぐ側で、白い帽子を見つけました。拾ってみると「ふわっ」とモンシロチョウが飛び出しました。誰かが捕まえておいたのでしょう。チョウの代わりに、夏みかんを帽子の下に入れて戻ると、タクシーの後ろのシートにおかっぱの女の子がちょこんと座っていました…。
さて、松井さんの運転する「空いろのタクシー」には、収録の8つのお話ごとに、いろんなお客さんが乗ってきます。赤ズボンのキツネ兄弟や、山猫、人の世界に棲むクマ紳士など…。そうしていつの間にか、とてつもなく不思議な世界に入り込んでいくのです。
「車のいろは空のいろ」シリーズは全3巻です。

泣いた赤おに

浜田 廣介 著　　梶山 俊夫 絵
偕成社　　1992年　　47p　　29×25cm

人間と友だちになりたいと思っている心優しい赤鬼。なかなか人間に信用してもらえず、悲しんでいるところに友だちの青鬼が、僕が悪い鬼として人間の家で暴れるから、君が僕をやっつけて追いだせ、と話をもちかけます。作戦は功を奏し、人間たちと仲良くなれた赤鬼。けれど、あれ以来現れない青鬼のことが気になって彼の家まで行ってみると、そこには赤鬼宛ての手紙が…。
浜田廣介の代表作を、原文のまま掲載しています。子どもの成長過程の時々に一緒に読んでいきたい本です。

かあちゃん取扱説明書

いとう みく 作　　佐藤 真紀子 絵
童心社　　2013年　　152p　　22×16cm

いつもガミガミうるさくて、「早く」が口癖の僕のかあちゃん。でもある時かあちゃんをほめると、上機嫌で僕の食べたいおかずを作ってくれました。そこで僕はひらめきました。かあちゃんの“あつかい方”をマスターするために取扱説明書(トリセツ)を作れば、僕の思い通りになると。
例えば、食べたいごはんを作ってもらうには、友達のかあちゃんの料理と比べておだてる。(この時の注意点は、友達のかあちゃんの料理はほめないこと)さらに、勉強勉強と言わせない方法は、勉強をしているふりをすること。…など。
でも、トリセツ作りが軌道に乗ってくると、僕の心にある変化が…。

火曜日のごちそうはヒキガエル

ラッセル・E・エリクソン 作　ローレンス・ディ・フィオリ 絵　佐藤 涼子 訳
評論社　2008年（評論社1982年）《アメリカ 1974》　82p　21×15cm

ウォートンとモートンはヒキガエルのきょうだい。ウォートンは掃除が、モートンは料理が大好きです。これだけならいいのですが、ウォートンが冒険好きというのがやっかいです。冬だというのに、モートンの作ったカブトムシの砂糖菓子があまりにおいしいので、トゥーリアおばさんに届けに行くというのです。

ウォートンはスキーを履いてさっそうと出かけましたが、ミミズクに捕まり、巣の中へ放り込まれます。“わしの誕生日は火曜日だ。お前の命は火曜日までだからな。”とミミズクは言います。逃げる方法を考えながら、ミミズクに言いつけられた通り部屋を掃除していました。でも、ミミズクが考えていたことは…。

「ヒキガエル とんだ大冒険」シリーズの第1巻目です。7巻まであります。

ジェニーとキャットクラブ　黒ネコジェニーのおはなし 1

エスター・アベリル 作・絵　松岡 享子・張替 恵子 訳　福音館書店
2011年（福音館書店 1982）《アメリカ 1944》　120p　20×14cm

ジェニーはニューヨークに住む、赤いマフラーがトレードマークの小さなネコです。ネコの集まりのキャット・クラブに入りたいけれど、何も特技がないので勇気が持てません。でも、ご主人がスケート靴をプレゼントしてくれ…。

このあとジェニーはみんなの仲間になっていき、世界をどんどん広げます。その姿に自分を重ね、ジェニーを応援したくなることでしょう。

最初の出版以来約70年。新しい装丁の3冊シリーズで再登場となりました。作者が飼いネコをモデルに描いたイラストと表紙の色も素敵です。

しっぱいにかんぱい！

宮川 ひろ 作　小泉 るみ子 絵
童心社　2008年　96p　22×16cm

1年生からずっとリレーの選手だった加奈。今年は6年生でアンカーをまかされました。ところがまさかの失敗をして落ち込んでしまいます。そんな時おじいちゃんから電話が…。おじいちゃんの家へ招かれ、久しぶりに集まった親戚の人々が、それぞれ失敗談を懐かしく語ります。今は笑いながら明るく話すみんなの姿を見て、加奈も自分の失敗を語り出すのでした。

「かんぱい！シリーズ」の1作目です。

シリーズは「うそ」「ずるやすみ」「わすれんぼう」「けんか」「0てん」をテーマに現在6作品あります。

長くつ下のピッピ

リンドグレーン 作　　桜井 誠 絵　　大塚 勇三 訳
岩波少年文庫　　2000 年《スウェーデン 1945》　　240p　　18×12cm

主人公ピッピは世界一強い、何と9歳の女の子。サルといっしょに自由気ままに暮らしています。毎日退屈(たいくつ)しているトニーたちのあこがれのまとです。大人たちはその行動の大胆(だいたん)さや、変わった服装や生活の仕方に眉(まゆ)をひそめるのですが、やがてピッピの無邪気(むじゃき)な明るさを愛し始めます。母を亡くし、父とも生き別れたピッピですが、本来子どもの持っている生命力、強さ、明るさを見せてくれます。

ピッピシリーズ3部作の第1作です。
他に「ロッタちゃん」、「やかましむら」、「カッレくん」シリーズなどがあります。

新美南吉童話選集 5

新美 南吉 作　　ささめや ゆき 絵
ポプラ社　　2013年　　134p　　21×15cm

第一話は「花のき村と盗人(ぬすびと)たち」。花のき村という平和な村に、5人組の盗人がやってきました。見習いの4人は昨日まで釜師(かまし)、錠前屋(じょうまえや)、角兵工獅子(かくべえじし)、大工(だいく)でした。かしらの指示に従い4人は村を探りに行きます。しかし、それぞれ盗人であることを忘れ、職人の目で家々を見てしまいます。
ひとり待っていたかしらの所へ、色白で品のいい顔立ちの小さな男の子が、子牛を預かってくれとやってきます。しめしめと思ったかしらでしたが、人から信頼された喜びで涙し、善人の心を取り戻していくのでした。
新美南吉童話選集(全5巻)には、代表作「ごんぎつね」「手ぶくろを買いに」などを含む48作品が収められています。

はれときどきぶた

矢玉 四郎 作・絵
岩崎書店　　1980年　　80p　　22×19cm

「日記は人に見せるものじゃない」…なのに母さんがこっそり見ていることを知った小学3年生の主人公畠山則安は、なんと、でたらめな”あしたの日記”を書くことにしました。“トイレにだいじゃがいました。”“おかあさんがえんぴつをてんぷらにしました。”“今日の天気は、午後からぶたがふりました。”すると、その内容が次々に現実になっていってしまいます。そして,最後は…。

本書はシリーズ化されています。

ビロードうさぎ

マージェリィ・ウィリアムズ 文　　ウイリアム・ニコルソン 絵　　石井 桃子 訳
童話館出版　　2002年《イギリス 1922》　　48p　　24×18cm

ぬいぐるみのビロードうさぎは、クリスマスの日にぼうやのもとにやってきました。

あるとき、木馬から子ども部屋の魔法のことを教えてもらいます。その魔法がおこると「ほんとうのもの」になれるというのです。

どこへ行くにもぼうやと一緒のビロードうさぎは、とても幸せな日々を過ごし、ある日、ぼうやの一番大事なものになることができました。でも、ぼうやが重い病気にかかってしまい…。

原作をもとに2007年に作られた、酒井駒子 絵・抄訳による絵本『ビロードのうさぎ』(ブロンズ新社)を手に取る読者も多いようです。

ムーミン谷の彗星

トーベ・ヤンソン 著　　下村 隆一 訳　　講談社
1990年(講談社 1965)《フィンランド 1946》　　246p　　21×15cm

ムーミントロールはムーミン家のひとりむすこ。ムーミン谷に彗星が近づいているというので大騒ぎです。ムーミントロールは彗星を調べるために遠い「おさびし山」の天文台に観測に出かけます。そこでスナフキンやスノークのお嬢さんと出会います。

おどおどしている人、おびえている人たちを立ち直らせるムーミン一家。どの人物も自由に自分らしく生きています。

ムーミン童話全集全9巻の一作目です。

1966年には国際アンデルセン賞を、1976年にはフィンランド最高の勲章を受章しました。

ものぐさトミー

ペーン･デュボア 作・絵　　松岡 享子 訳
岩波書店　　1977年《アメリカ 1966》　　44p　　21×16cm

　なまけもののトミー･ナマケンボは、電気仕掛けの家に住んでいます。朝はベッドが自動で傾き、トミーを熱い風呂の中にすべり込ませ、そのあとのハミガキ、髪をとかす、食事まで、すべてを機械がやってくれるのです。トミーがすることといったら、ベッドに入ることを望みに、朝落ちてきた高さの分だけ、階段を上ること。
　そんなある日、長い停電が起きました。やっと電気が流れるようになった時、トミーの想像していなかったことが起きたのです。

ルドルフとイッパイアッテナ

斉藤 洋 作　　杉浦 範茂 絵
講談社　　2007年（講談社 1987）　　274p　　21×15cm

　ぼくの名前はルドルフ。魚屋でシシャモを失敬して追いかけられ、走るトラックの荷台にジャンプ。その時頭を打ち、気がついたら知らない町にいました。ここで生きていくためには強くて大きな猫に頼らなければなりません。そこで知り合ったのがイッパイアッテナです。名前がいっぱいあって困っているようです。イッパイアッテナは文字の読める教養の高い猫です。ぼくも文字や多くのことを学び、故郷を見つけることもできましたが…帰れません。
　他に『シマのないトラ』（偕成社）があります。
　1986年、本作品で講談社児童文学新人賞、『ルドルフとともだちひとり』で野間児童文芸新人賞、『ルドルフとスノーホワイト』で野間児童文芸賞を受賞。

ふしぎな木の実の料理法　こそあどの森の物語

岡田 淳　作
理論社　　1994年　　192p　　22×16cm

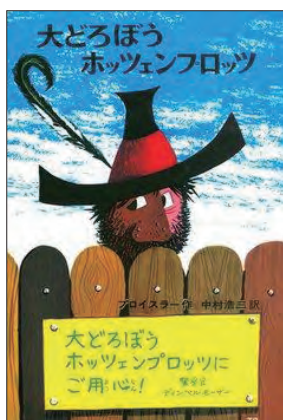
　この森でもなければ　**そ**の森でもない　**あ**の森でもなければ　**ど**の森でもない…「こそあどの森」での物語。
　人との関わりが苦手な少年スキッパーのもとに、不思議な木の実が送られてきました。でもその料理法を書いた手紙は雪でぬれて、大事なところが消えています。勇気を出して、森の住人たちにたずね歩きますが、なにをしてみても木の実は何も変わりませんでした。 でも、ある朝木の実が…。
　「こそあどの森の物語」シリーズは11巻あります。森の住人たちの住む家など、夢のある挿絵とともに、人と人のつながりの素晴らしさが、心を温かくしてくれます。
　他に『放課後の時間割』（偕成社）などがあります。

少年たんていブラウン　1

ドナルド・ソボル 作　　桜井 誠 画　　花輪 かんじ 訳
偕成社　　1973年《アメリカ 1963》　　205p　　19×13cm

「歩く百科事典」と呼ばれているロイ・ブラウンは、アメリカの小さな町アイダビルに住んでいます。ロイは何と10歳にして「名探偵」！ アイダビルでおこる難事件の謎を次々に推理し、警察を助けます。犯人の嘘を見抜いたり、ピストル強盗を見つけたり…どのように推理し、謎を解くのでしょうか。
答えは本文の中にはありません。本のうしろにまとめてあります。読者が自分で推理して答えを見つける楽しさがあります。
全10巻のシリーズで各巻に9～10話入っています。

大どろぼうホッツェンプロッツ

プロイスラー 作　　F＝J＝トリップ カバー絵　　中村 浩三 訳
偕成社　　1984年（偕成社 1975）《ドイツ 1962》　　207p　　21×15cm

カスパールはおばあさんの誕生祝いに、友だちのゼッペルと一緒にコーヒー挽きを作りました。ハンドルを回すと、コーヒーを挽くのと同時に歌を演奏するのです。おばあさんはとても大事に使っていましたのに、何とあの大どろぼうホッツェンプロッツが盗んで行ってしまったのです。カスパールとゼッペルはそれを取り返しに行く途中、帽子を交換しました。大どろぼうに捕まってしまいましたが、大どろぼうは帽子だけで二人を判断しています。カスパールはそれを利用して、大どろぼうを手玉に取ります…。
『大どろぼうふたたびあらわる』『大どろぼう三たびあらわる』へと続きます。

天使のかいかた

なかがわ ちひろ 作
理論社　　2002年　　88p　　21×16cm

友だちがそれぞれにペットを飼っていることを、うらやましく思うさち。ある日、のはらでひろった天使を飼うことになりました。天使って、どうやって飼えばいいんだろう、なにを食べさせたらいいんだろう…。意外にも天使は、さちがしてくれる、さち自身のお話が大好物でした。天使を飼うことで、できなかったことができるようになったりと、さちは成長していきます。
そんなある日、転校生のきのこちゃんがやってくるのですが、次第にクラスの仲間はずれに。友だちになりたいのに、声をかける勇気がなくひとりで悩むさち。一方そのころ、天使の元気がなくなり、ぐったりしてしまいました。

百まいのドレス

エレナー・エスティス 作　　ルイス・スロボドキン 絵　　石井 桃子 訳
岩波書店　　新訳版2006年（1954）《アメリカ 1944》　　92p　22×16cm

アメリカの片田舎の学校が舞台で、いじめがテーマになっています。
貧しいワンダは、ドレスを百まい持っていると言い張ったことで、毎日女の子たちにからかわれます。ある日、ワンダは学校に来なくなりました。“百まいのドレス”の意味を知った時、いじめを黙って見ていたマデラインは後悔するのです。
70年前の出版ですが、“いじめの心理は、古今東西誰もが持ち合わせているのだ”と考えさせられます。首謀者の言い分や、黙って見ていた子の気持ちも丁寧に描かれています。自分もどの立場にもなり得るのだと考えさせられます。
日本で60年前に出版された時には「百まいのきもの」という題でしたが、現代の子どもたちにも読んで欲しいと題名を変えての新訳だそうです。

アンデルセン童話集 1

ハンス・クリスチャン・アンデルセン 作　　大畑 末吉 訳
岩波少年文庫　1986年（文藝春秋社1928）《デンマーク 1835》246p 18×13cm

「皇帝の新しい着物」は、“はだかの王さま”としてお馴染みです。 一時間ごとに着がえをするほど衣装好きの王さまの国に、はた織り職人と名のる2人のペテン師がやってきました。彼らの織る布は、“自分の役目に向いていない者”や“愚か者”には見えないというのです。本当は見えないのに、布をほめる家来や王さま。いよいよ仕上がった衣装を着せてもらい、行列を従えてきた王さまを見て、国民も口々にほめます。しかしそのなかで、一人の小さな子どもが、「だけど、なんにも着てやしないじゃないの」と言ったのでした。
「おやゆび姫」「空飛ぶトランク」「モミの木」など11のお話が収められています。『アンデルセン童話集』は全3冊で、33のお話が楽しめます。

くまのプーさん

A・A・ミルン 作　　E・H シェパード 絵　　石井 桃子 訳
岩波少年文庫　2006 年（岩波書店 1940）《イギリス 1926》　148p　21×15cm

幼い少年クリストファー・ロビンが、美しい森で仲良しの動物たちと愉快な冒険をくり広げます。「バタン・バタン，バタン・バタン，」クリストファーが階段を降りてくる音です。プーが出てくるお話をパパにおねだりにきたのです。
「プーが風船を使ってはちみつをとるお話」「プーがウサギの穴におしりをひっかけたお話」など…。プー、コブタ、イーヨーにカンガルーたちとたっぷり冒険をして、また「バタン・バタン，バタン・バタン，」と階段を登ります。
世界一有名なクマ、プーさんが活躍する楽しいファンタジー。イギリスの詩人が幼い息子のために書いた二冊の本の第一作です。

片耳の大シカ　椋鳩十名作選

椋 鳩十 作　　小泉 澄夫 絵
理論社　　2014年　　158p　　21×16cm

屋久島のシカ狩り名人吉助おじさんと僕らが、シカを狩ろうと待ち伏せしていると、片耳の大シカが群を引きつれて現れました。狩人のやり口を知り尽くしている大シカを、なんとかしとめたいと猟犬に追わせますが、猟犬はその大きな角に引っ掛けられて、谷底深く投げ込まれてしまいました。

そのうちに、天気が急変して大嵐になりました。凍ってしまいそうな体は強い眠気におそわれます。「ねむったらあかん。ねむったらそのまま死んでしまうのだ。」ぼくらは朦朧とする意識の中、ほら穴に辿り着きましたが、ぬれた体には我慢できない寒さがおそいます。もうだめかと思われたとき、異様な光景を目にしたのです…。

他に『大造じいさんとガン』(理論社) 『マヤの一生』(ポプラ社)などがあります。

わたしの妹は耳がきこえません

ジーン・ホワイトハウス・ピーターソン 作　　デボラ・レイ 絵　　土井 美代子 訳
偕成社　　1982年《アメリカ 1977》　　30p　　26×21cm

耳が聞こえない妹は、私の唇や手の動きだけでなく、瞳の表情を見て、私の言うことをよく理解します。また妹は、怒ったり、嬉しかったり、悲しくなった時には、顔の表情や肩の動きで、誰よりも深く自分の気持ちを相手に伝えます。

それから妹は、夜中真っ暗な中で、大声で泣くこともあります。私は、“聞こえないこと”に思いを馳せるために、暗闇で耳に栓をしてみます。

作者ピーターソンが、妹への愛情を詩のように美しい文で綴った作品です。

この作品を通して、耳が聞こえない人やその家族の心の世界を感じることで、私たちの世界もまた奥深いものとなるでしょう。

くらがり峠

長沢 正教 作
郁朋社　　2004年　　160p　　22×16cm

風土記や日本書紀などの古典、民話などを参考にした15の短篇集です。最後の「どんぐり」は、厚木と半原にまつわる江戸時代中ごろのお話です。厚木の相模川のほとりに、からすが棲みついた3本の大きなくぬぎの木がありました。どんぐりは、飢饉のときの食べものとして重宝されていたそうです。そのくぬぎの木がどうして町の中に生えたのでしょう。それには、半原に住んでいたある家族の、季節と共に暮らした物語や願いがあったのです。木は橋の材料として切り倒されてしまいますが、どんぐりは多くのからすが仏果山めざして運び…。

書名になっている「くらがり峠」は、奈良と大阪を行き来する峠にまつわるお話です。